

(PDF版・4の4) 『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』 「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「二 人間の用意」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「二 人間の用意」 (232-325 頁)

「二 人間の用意」

『自然』神学には、さらに、それが人間論的な自然的人間だけでなく、教会論的なキリスト教的に人間であれ（すなわち、第三の形態の神の言葉である「教会の中での人間」であれ）、生来的な自然的な人間が、その自由な自己意識・理性・思惟の類的能力（人間の自由な内面の無限性）を持っていることからして、その「自然的な力そのものが属しているだけでなく、……まさに<独占的な>地位が与えられているということ」に「よく注意せよ」。したがって、『自然』神学の「問題を明確に提起することができない限り、そして『自然』神学から対象的になって距離を取ることができない限り」、「人間が、今確かに由来して来るところから由来して来つつ、彼は最大の自明性をもって、換言すれば彼からして、〔その最初から〕……『自然』神学の中に入って行く……」。ここにおいては、『自然』神学は、……はじめからして、……徹頭徹尾すでによく知られており確実なものであるという優先権を持っている。このような訳で、『自然』神学の弁護は、……見かけ上は、ただ『自然』神学を<また>可能であるとして、<また>正しいとして、<また>有効であるとして弁護することだけが問題であるように見えるところでも、秘かには常に、『自然』神学は、実際には、人間にとって<唯一の>可能な、正しい、有効な神学であるということによって生きる……」。このような訳で、「それとしての『自然』神学の現象が顕著で、不思議で、説明されなければならないのではなく、むしろ……『自然』神学が、〔第三の形態の神の言葉である〕キリスト教会の場の中で、そもそもそのほかの宗教の場におけるのと同じように、結局、……〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神の特別〕『啓示』の神学を、〔その<啓示>の神学から独立した仕方ですら、自分の傍らに<耐える>ことができるという事実から成り立っている現象こそが〔すなわち、事実的に、その『啓示』の神学から独立した仕方ですら、『啓示』の神学を自分の〔『自然』神学の〕傍らに<並べて>成り立たせている現象こそが〕、顕著で、不思議で、説明されなければならないのである」。この時、客観的な正当性と妥当性をもって根本的包括的に原理的に『自然』神学、<キリスト教的>『自然』神学を批判したルートヴィヒ・フォイエエルバッハによれば、「神とはまさに、人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質（存在者）、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」（『宗教の本質にかんする講演』）し、「『自然』神学」の<段階>で停滞し思惟し

語るキリスト教における「(中略) 神の啓示の内容は、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての〕神としての神から発生したのではなくて、〔徹頭徹尾第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方ではないところで、それ故に類的機能を持つ自由な〕人間的理性や〔際限なき〕人間的欲求やによって規定された〔恣意的独断的な人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」としての〕神から発生した……。 (中略) こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない!』……」し、まさに「(中略) 神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」(『キリスト教の本質』)。「われわれは、言うまでもなく、ここで、一般に人間について語っているのではなく、**教会の中での人間について語っている**、換言すれば一方において罪、死、悪魔、他方において説教、聖礼典、神の言葉によって強力に挟み撃ちされている人間について語っている」。このような訳で、「われわれは、ここで、何かある一つの自然神学と取り組んでいるのではなく、まさに<キリスト教的>『自然』神学と取り組んでいる」。「宗教とは、すべての神崇拜の本質的なものが人間の道徳性にあるとするような信仰であるとしたカント〔「何かある一つの自然神学」〕は、本源的であるゆえに、すでに前もってわれわれの理性に内在している神概念の再想起としての神認識という点で、アウグスティヌスの教説〔<キリスト教的>『自然』神学〕と一致する」(『カント』)——この後者のような、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」(『教会教義学 神の言葉』)の<総体的構造>(『知解を求めの信仰 アンセルムスの神の存在の証明』)に「信頼しない」ところの、それ故に「教義学的な合理主義を明確に否定しない」ところの、すなわち「『自然』神学」の「問題を明確に提起する」ことができ得ていないところの、それ故に「『自然』神学」から対象的になって距離を取ることができず、それ故に「『自然』神学」から対象的になって距離を取らないで「『自然』神学」を前提するところの、「存在するものそのもの、その純然たる造られた存在、造ラレタモノヲトオシテ、知解サレタ創造主ヲ認識シテ、私タチハ三位一体ナル神ヲ知解スルヨウニシナケレバナラナイ、ソノ跡ハフサワシイカタチデ被造物ノウチニ顕レテイルノデアル」(『教会教義学 神の言葉』)というアウグスティヌスの思惟と語りにおける<キリスト教的>『自然』神学と取り組んでいる。すなわち、われわれは、次のような「『自然』神学」と取り組んでいる——「少なくともさし当って先ず、見たところは啓示からしての神の認識可能性とそれに対応する神学を否定せず、……自分〔自分の「『自然』神学」〕を〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の特別〕『啓示』の神学の<傍らに>〔「並べて」〕置こうとしているように見える神学〔すなわち、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリ

ストにあつての神としての神の特別啓示に規定された「『啓示』の神学」だけでなく、類的機能を持つ人間の自由な自己意識・理性・思惟によって対象化され客体化された人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」もと主張するところの、「並存」の神学、「混合神学」)、それ故に「見たところは、至極要求がましくなく、謙虚な態度で登場し、断言的に語らずただ仮説的に語り、本来的な神論ではなく、ただその序論を、いわゆる信仰ノ前置きを述べようとしており、事柄そのものを語ろうとせず、ただ事柄を導入しその理解を準備しようとしている神学」、「それであるから、啓示、恵みをただ単に〈また〉承認するだけでなく、啓示、恵みに対して内容的にも形式的にも〈優先権〉を与えている、いや無条件的にさらに大きな重要性と正しさを認めている〔〈キリスト教的〉』『自然』神学と……取り組んでいる」。例えば、われわれは、「聖霊論的説教論」を論じたルドルフ・ボーレンやそれを首肯する仕方で彼のそれを論じている東京神学大学実践神学者の小泉健および東北学院大学神学者の佐藤司郎が主張する、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその「最初の直接的な第一の啓示ないし和解の概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とするバルトの「神の言葉の神学」に対して、その神学は「人間の経験の位置づけが弱い」から、近代的な人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍としての「人間の経験」も尊重すべきであるとする「〈キリスト教的〉『自然』神学と……取り組んでいる」、換言すれば彼らが主張するところの、第三の形態の神の言葉である「教会の地盤の上で、……〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉である〕啓示の事実を通して明らかに停止が命じられ……一つの小さな副次的な可能性でしかない」、そのような「〈キリスト教的〉『自然』神学と……取り組んでいる」、また『説教の本質と実際』に即して言えば、彼らが、「聖書への絶対的信頼」に基づくことをしないで、それ故に「実際の生活にはなお多くのことが必要であって、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書は生きるために必要なことを言いつくしていないと考え」て、それ故にまた「福音は、〔生来的な自然的な〕われわれの思考や心情の中にある」と考えて、それ故にまた生来的な自然的なわれわれ人間の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使して対象化され客体化されたわれわれ人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神」の啓示、すなわちわれわれ人間自身の「思想、最高の習慣、最良の見解、そのようなもの」にあると主張する、第三の形態の神の言葉である「教会の地盤の上で、……〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉である〕啓示の事実を通して明らかに停止が命じられ……一つの小さな副次的な可能性でしかない」ところ

の、そのような「<キリスト教的>『自然』神学と……取り組んでいる」。

<キリスト教的>「『自然』神学を教会の場の中で、またカトリック主義においても際立たせているその独占的な立場が覆い隠されている隠蔽が、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神の特別〕啓示を通して〔<キリスト教的>〕『自然』神学に対して置かれた<しるし>として、いや啓示からして〔<キリスト教的>〕『自然』神学を脅かしている克服の<しるし>として見られ理解されることができるといふことは、本当のことである」——「人は、このことが、ただ……全く別な次元から光がこの関係の上にさしてくることからしてだけ期待しなければならない〔すなわち、ただイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいてだけ、「出来事となって起こる」であろうことといふことを期待しなければならない〕……」、「ちょうど人が、そもそも〔<キリスト教的>〕『自然』神学の限界づけとその克服を、結局ただ全く別な次元から〔それとしての〕教会の領域〔すなわち、生来的な自然的な人間的な領域としての教会の領域〕の中にさしてくるあの光〔すなわち、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>〕から期待すべきであるように」。

類的機能を持つ人間の自己意識・理性・思惟によって対象化され客体化された人間自身の意味的世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神」の啓示、すなわち一般的啓示、一般的真理を対象とする『『自然』神学<と>〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神の特別啓示、啓示の真理を対象とする〕『啓示』の神学が、〔それとしての人間の側から、すなわち生来的な自然的な人間の側から〕あのように……並存の関係の中に〔すなわち、自分の<キリスト教的>『自然』神学を『啓示』の神学の<傍らに>「並べて」置くといふ並存の関係の中に〕、すなわち相互に働いかけ合う関係の中に入れられる時、一体、そこで実際何が起こっているのでしょうか、<キリスト教的>「『自然』神学は、それが啓示あるいは啓示の神学に対して、特別な場所を空けておくといふことでもって、一体何をしているのでしょうか、<キリスト教的>「『自然』神学、それがその場所の優位性、それからまた啓示および啓示と取り組んでいる神学〔「啓示の神学」〕の優位性を認めることによつて、一体、何をしているのでしょうか。生来的な自然的な「人間は、まさに啓示をも吸収し・飼いならしてしまい、彼に向かって問われた問いを、彼によつて与えられた答え〔すなわち、生来的な自然的な彼の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使して対象化され客体化された彼自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」〕に変えてしまったのである」、この時彼は、「存在者レベルでの神」を、「存在者レベルでの神の啓示」を、「存在者レベル

での神の啓示の神学」、「<キリスト教的>『自然』神学」を「選んだのである」。したがって、「彼は、今、啓示をも自由に処理する〔すなわち、彼は、今、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神の特別啓示、啓示の真理をも自由に処理する〕」。「彼が、……彼の自己意識の権能を放棄することなしに、いや彼自身が、ここでこそまさしくもって〔類的機能を持った自由な〕自己意識の権能を用いつつ、自由に処理することができる可能性となる」。「彼は、その巧妙な名人芸を、今こそはじめて実証し、神の恵み〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神の特別「啓示」、「啓示の真理」〕に逆らう抗争に、今こそはじめて勝利を収めた……」。しかし、彼は、この時、次のような客観的な正当性と妥当性とをもった、根本的包括的な原理的な批判の下に置かれるのである——生来的な自然的な「人間の内的生活は、自分の類・自分の本質に対する関係における生活である。人間は思惟する、すなわち人間は会話をする、人間は自分自身と話をする。動物は自分以外の他の個体がいなければ類の機能をひとつもはたすことはできない、しかし人間は他人がいなくとも考えるとか話すとかという類的機能……を果たすことができる」、すなわち人間は自由な内面の無限性を持っている、「もし君が無限者を思惟するならば、そのとき君は思惟能力の無限性を思惟し且つ確証しているのである。そして、もし君が無限者を情感するならば、そのとき君は感情能力の無限性を情感し且つ確証しているのである。理性の対象とは自己自身にとって対象的な理性であり、感情の対象とは自己自身にとって対象的な感情である」（ルートヴィヒ・フォイエルバッハ『キリスト教の本質』）、「神とはまさに、人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質（存在者）、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」（ルートヴィヒ・フォイエルバッハ『宗教の本質にかんする講演』）。この時、「<キリスト教的>『自然』神学」の<段階>で停滞し思惟し語るキリスト教における「（中略）神の啓示の内容は、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての〕神としての神から発生したのではなくて、〔徹頭徹尾第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方ではないところで、類的機能を持つ自由な〕人間的理性や〔際限なき〕人間的欲求やによって規定された〔恣意的独断的な人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」としての〕神から発生した……。 （中略） こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない！』……」、まさにこの時には「（中略）神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」（『キリスト教の本質』）、「『今日まさにこのマールブルク〔すなわち、ブルトマン、ブルトマン学派〕では、無理やり模造された敬虔さと結びついて、弁証法の見せかけがとくに肥大している』が、それよりは『むしろ無神論という安っぽい非難を受

け入れた方がよい』、〔類的機能を持つ人間の自由な自己意識・理性・思惟によって対象化され客体化された人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」〕

『いわゆる存在者レベルでの神への信仰は、結局のところ神を見失うことではなからうか』」（木田元『ハイデッガーの思想』）。この時、「自然と＜並んで＞その傍らに存在する〔キリストにあつての神としての神の〕恵みは、たとえ恵みが自然に対してどれほど優越した仕方で位置づけられていようと、明らかにもはや神の恵みではなく、むしろ人間自身によって人間に与えられた恵みである〔すなわち、むしろ類的機能を持つ人間の自由な自己意識・理性・思惟によって対象化され客体化された人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」における恵みである〕」。「人間自身に固有な神認識と＜並んで＞存在する啓示は、たとえそれがただ序説としてだけ力を奮わしめられようと、明らかにもはや〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての〕神の啓示ではなく、むしろ人間に彼自身の映像の中で出会う啓示を言い表す・貸し与えられたあるいは横領された新しい表現でしかない〔すなわち、むしろ類的機能を持つ人間の自由な自己意識・理性・思惟によって対象化され客体化された人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」における啓示でしかない〕」。「人間によって承認され・考慮に入れられ、人間によって世のほかのもろもろの現象の傍らに＜並べて＞置かれた奇蹟——例えば靈感を受けた聖書の奇蹟、あるいは絶対無謬性をもって語る教会の奇蹟は、明らかにもはや神の奇蹟ではなく、むしろ人間的な世界観および自己理解の驚くべき要因である。人間が、このより高度な段階において選ぶことができるどんな超自然主義も、それは、結局、人間によって選ばれたものとして、最終的にはただより高度な仮面をつけた自然主義でしかない…

…」。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神の＜現実の＞啓示は〔「神の恵み」は〕、言うまでもなく人間によって選ばれ・彼の諸可能性のうちの一つの可能性として、ほかの可能性の傍らに並べて置かれ、そのほかの可能性と共に一つの体系の中に編み入れられることはできない…

…。〔すなわち、〕神の＜現実の＞啓示は〔「神の恵み」は〕、人間が選ぶことができず、むしろそれによって人間自身が＜選ばれた＞として見てゆかなければならない……＜唯一の＞可能性である……」。バルトは、『教会教義学 神の言葉』で、次のように述べている——第三の形態の神の言葉である教会の宣教（説教と聖礼典）およびその一つの「補助的機能」（「教会的な補助的奉仕」）としての神学における思惟と語りが、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないか」ということは、神ご自身の決定事項であつて、われわれ人間の決定事項ではない。すなわち、それは、「『主よ、私は信じます。私の不信仰を助けて下さい』というこの人間的態度〔人間の側の「祈りの態度」〕に対し神が応じて下さる〔先行する神のその都度の自由な恵みの神的決断によ

る「祈りの聞き届け」ということに基づいて成立している」。しかし、「<キリスト教的>『自然』神学は、あたかも〔先行する神の〕啓示が選ぶ可能性ではなく〔先行する神の啓示の「後に続いて」後続べき人間の側に〕選ばれるべき可能性であるかのように、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている先行するキリストあつての神としての神の特別啓示が〕唯一の可能性ではなく、そのほかの可能性のうちの<一つの>可能性であるかのように、〔先行するキリストにあつての神としての神の特別〕啓示と関わることによって、そのすべてのおそれおののきと謙虚さにも拘らず、〔先行するキリストあつての神としての神の特別〕啓示を、<キリスト教的>『自然』神学<自身の>技術の新しい形成物に造りかえてしまうのである」。この時、「<キリスト教的>『自然』神学は、……すでに発端において、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている先行するキリストあつての神としての神の特別〕啓示を、〔先行するキリストあつての神としての神の特別〕啓示でないものにしてしまったのである〔換言すれば、類的機能を持つ人間の自由な自己意識・理性・思惟によって対象化され客体化された人間自身の観念的生産物、人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神」における啓示にしてしまったのである〕」。このような訳で、そこでは、「**本当に神が語り給うたのであろうか……**。〔<キリスト教的>〕『自然』神学の神は〔換言すれば、フォイエルバッハやハイデggerが客観的な正当性と妥当性をもつて、根本的包括的に原理的に批判した人間自身の観念的生産物としての「存在者レベルでの神」は〕、そのことに対して、**確かに何も反論すべきものを持っていないであらう**」。